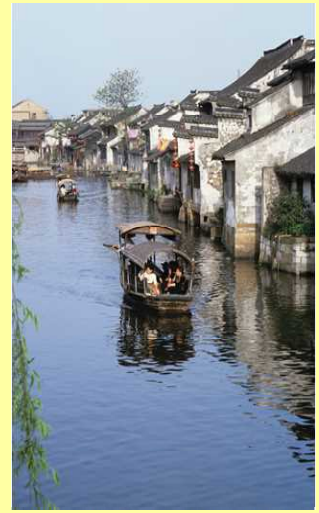


故郷第二場面 読んだ読んだ

三年三組

氏名

明るく日の朝早く、わたしはわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、く「おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない。」



主人公は、まず家の前に立った。お金がなく、手入れできていない家の様子から、自分の情けなさを改めて感じ、落胆した。そして、母と再会する。母は出迎えてくれたり、茶を注いでくれたりと繕ってくれて、気遣ってくれて、機嫌がよいように見えたが、母のことを気にかけている主人公は、引越しが辛い母のやるせない表情をさすがに感じ、申し訳なく思っている。そして、引越しの暗い話の後にはルントウの明るい話を母は持ち出して、主人公の気を紛らわそうとする。このように、お互いを気遣い合っている場面である。

さん

主人公は母と再会し、もう家は借りてあること、家具も少しは買ったことなどを話した。母は機嫌良かったが、引越したくないというやるせない表情は隠し切れていなかった。これは、一場面の主人公と同じように悲しさをごまかそうとしている。暗い引越しの話をしたくなかった母は、最後にルントウについての明るい話に変えた。

さん

主人公は、茶を注いでくれるなどして自分を休ませ、すぐに引越しの話を持ち出さない母の行動と、やるせない母の表情から「母は無理して自分に気を遣っている」と気づいている。また、引越しの話から、ルントウの話にしたところでは、「明るい話にしよう」と主人公のこと

を気遣う母の優しさが表れている。この二人は、お互い気遣いながらやりとりをしているのではないだろうか。

さん

主人公は母親と再会したとき、やるせない表情をしながらも、自分におもてなしをして無理をしている母親を見て、辛くなった。母親は息子を悲しませたくないがために、一生懸命頑張っていたが、その姿が余計辛くなってしまった。このような暗い空気を変えるために、母親はルントウの話をして空気を変えようとした。

さん

主人公は再会した母を見て、茶などを出し、明るく自分を迎えてくれる講堂の裏に、本当はこの家を手放したくないが息子を傷つけないという思いがあることに気づき、逆に辛くなった。そして、引越しの話では、新しい家はもう借り、家具も少しは買ったことを主人公は話した。家具の足りない文は道具類を売って、その金で買おうとしたが、高く売れなかった。こうして暗い空気になってしまったので、現実を逃避し、母はルントウの話を持ち出し、少しでも明るくしようとした。

さん

主人公は、家の表門に立ったとき、家の屋根に一面に枯れ草のやれ茎が折から吹く風になびいている様子を見て、この家が持ち主を変えるほかなかったということを感じた。枯れ草のやれ茎が「おまえのせいだ、この家はこんな風になったんだ」と主人公を見下すようにも見えて、主人公は自分がしてしまったことの大きさを改めて痛感した。母と再会したとき、母の機嫌は確かに良かったが、やるせない表情は隠し切れていなかった。主人公を座らせ、お茶を注いだり、引越しの話をすぐに持ち出さなかったりと、主人公は母の優しさを感じた。しかし、それと同時に、母に無理をさせてしまったという罪悪感をも感じた。

さん